



目 次

「金沢大学学術情報基盤整備計画」について(内島 秀樹)	2
韓国語・中国語 CD - ROM 閲覧用コンピュータの設置に寄せて(安部 聡一郎) ...	4
平成16年度企画展	
「文字・人・こころ - 金沢大学ゆかりの墨跡・拓本・手跡」(押見 智美)	6
図書館のトピックス	
「成瀬正居日記」を翻刻・電子化	7
マイクロ資料室を館内移転しました	7
自然科学系図書館 もうすぐ完成	7
本学教員著作等寄贈図書リスト	7
としょかん日誌(2004年7月~12月)	8



「広開土王碑拓本」を熱心に見る見学者(本文6ページ参照)

「金沢大学学術情報基盤整備計画」について

情報企画課 内 島 秀 樹

金沢大学では、平成13年度に図書館委員会内に設置された「学術情報小委員会」での決定を踏まえて、幾つかの電子ジャーナルパッケージと論文データベースが導入された。

小委員会での基本的な考え方は、

1. 電子ジャーナルは全学的な観点から整備する
2. 電子ジャーナル経費は全学共通経費により負担する
3. 一部の電子ジャーナルは受益者負担を導入する

の3点からなっている。

1は、電子ジャーナルの特性である、誰でもキャンパス内のどこからでもいつでも使えることを踏まえて、受益者負担による導入ではなく、大学全体の学術基盤として整備すべきという考え方である。

2は、電子ジャーナルの契約構造を踏まえている。パッケージ型の電子ジャーナルの契約は、(1)冊子体の購読規模の維持(2)電子ジャーナル経費、の2階建てとなっている。

(1)は各研究室等で購入している冊子の総額で、(2)はそれに一定の方式に基づいてチャージされる電子ジャーナルのコンテンツ料金である。(1)は各部局でキャンセルをしないで購読し続ける必要があり、(2)は全学的な共通経費により負担する部分である。

3は、パッケージ型の電子ジャーナルは特定の出版社の全タイトルが利用可能となり、多くの分野の雑誌が利用できるため、全学的な負担が適している。しかし、非パッケージ型すなわちタイトルごとに契約する電子ジャーナルの場合は、受益者が限られるため、特定分野の受益者にも負担をお願いするものである。

平成14年度には、文部科学省から電子ジャー

ナル経費として約700万円余り(現在は1,150万)の予算が配当され、2の考え方にに基づき、2階建ての(2)の電子ジャーナル経費に充当した。これにより、ElsevierのLife Science Collection, Springer, Blackwell(人文社会系), Natureなどのパッケージを導入した。また、3の受益者負担を含めた個別タイトルやAPS(American Physical Society)などの希望調査に基づく契約(負担は全額図書館持ち)も行った。電子ジャーナルタイトル数は、平成16年度実績で1,471となっている。

しかし、電子ジャーナル契約の前提となる雑誌(冊子体)に関しては、各部局の研究費による購入に依存しており、厳しい予算状況の中キャンセルが相次いだ。これまで附属図書館から各教員への雑誌の購読希望調査の際に、特定の出版社のタイトルのキャンセルをしないように要望してきたのは、(1)の冊子体の購読規模の維持のためであった。

とりわけ、平成17年度に向けた購読調査では、法人化後の研究費の減少を踏まえて大量のキャンセルが発生した。仮にすべてのキャンセルを放置し、まったく予算的な手当てをしない場合には金沢大学の電子ジャーナルは限りなくゼロに近づくという、研究大学を目指す本学としてはきわめて危機的な状況となった。もともと本学の1,471タイトルは他大学と比較しても極めて低い数字であり、北信越地区では8大学中最低の水準であった。ちなみに同規模の大学では、新潟大学が14,523タイトル、千葉大学が7,371タイトルを導入している。

このような状況を踏まえて、図書館委員会に設けた「電子ジャーナルの整備方策に関する作業部会」で「金沢大学学術情報基盤整備計画」(案)が議論され、了承を得た。その後、財務担当理

事から全学中央経費による電子ジャーナル経費の措置について理解を得るとともに、昨年9月には橋本附属図書館長による全部局長への説明会が開催され、整備計画が全学的に了承された。また、役員懇談会においても計画の実施について理解が得られた。「金沢大学学術基盤整備計画」の骨子は以下の通りである。

(詳細は以下の URL を参照

<http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/jimu/ej/index.htm>)

1. 「金沢大学学術基盤整備計画」は3年間継続する。
2. 部局の電子ジャーナル関連雑誌(=冊子体)の予算を共通経費化する。
3. 2に上乗せして支払う電子ジャーナルコンテンツ料金は全学中央経費から措置する。
4. 予算の効率的執行のため、「冊子+電子ジャーナル」から、「電子ジャーナル・オンリー」の契約へ移行していく。平成17年度からは、ScienceDirectが電子ジャーナル・オンリーの契約となる。(ただし、冊子体希望者は受益者負担で購入する)
5. 2の雑誌の負担金は、平成14, 15, 16年の3年間の雑誌購読額の平均値により算定する。ただし、理科系部局については負担の40%について、教員数を考慮した再配分を行う。
6. 5の負担方法については来年度図書館委員会内に「学術情報整備小委員会」(仮称)を設置し、再度検討する。
7. 対象パッケージは、ScienceDirect (Freedom Collection), Springer, Blackwell(SSH), ACS (American Chemical Society)などで、平成18年度には、Blackwell(自然系), Kluwer, 全分野にわたる論文データベースなどを追加導入する。

1は、電子ジャーナルの契約がおおむね3年間継続するモデルのため、それに合わせて期間を設定したものである。2は、冊子体のキャンセルを止め、購読規模を維持するための措置である。予算を図書館で集中的に執行し、予算セグメントの集約と業務の合理化を行う側面もあ

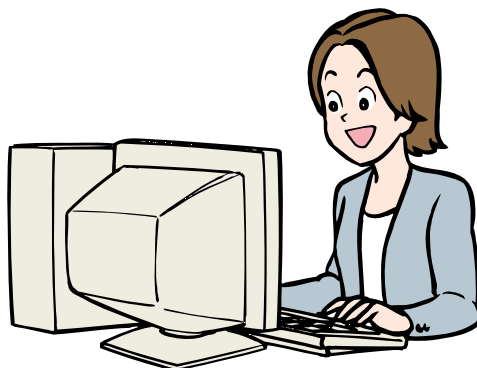
る。3は、電子ジャーナル料金は全学的に負担すべきとの考えに基づく。全学中央経費については、前記の文部科学省からの電子ジャーナル経費に加え、運営費交付金から電子ジャーナル経費を別枠で継続的に措置することが決まっている。

これにより、平成17年度には、約2,800タイトル、平成18年度には約3,800タイトルの電子ジャーナルが利用可能となる。この数で必要十分というわけでは決していないが、おおむね国立大学の平均的なタイトル数は確保できる。また、この計画が承認されたことにより、欧米の総合大学ではごく当たり前の研究基盤となっている電子的な学術環境を整備するための予算構造が本学において確立される見通しとなった。

法人化後の大学のあり方の一つとして大学運営の個性化があげられる。しかし、大学の研究基盤を国際的レベルに標準化することなしに個性化はありえない。その意味で、本計画は、学術情報という観点から、大学の研究基盤を国際的な標準により整備するという意味があることを強調しておきたい。

最後に厳しい財政状況の中、本計画にご理解を頂き、部局雑誌予算の共通経費化にご協力頂いた各部局長及び部局事務の方々にお礼を申し上げます。

(うちじま ひでき 情報企画課課長補佐)



韓国語・中国語 CD - ROM 閲覧用コンピュータの設置に寄せて

安部 聡一郎

154号にて既報のように、この度平成15年度重点化経費「東アジア地域分野教育における電腦教育環境の整備と教育方法の改善」によって中国語及び韓国語 CD - ROM 閲覧用コンピュータが中央図書館に導入された。90年代以降、コンピュータの普及にあわせて台湾、韓国、さらに中国で資料の電子化が積極的にすすめられ、加えてここ10年来のインターネットの発達と共に Web 公開も行われるようになったため、今や東アジア研究はどの分野もコンピュータの利用抜きには考えられない状況となっている。こういった環境の変化への対応は環日本海地域の中核大学を標榜する本学にとって必須であり、今回はそのための最低限の設備を整えることを目的とした。

これら資料のうち Web 上で公開されているものについては、現行の日本語版 OS が動作するコンピュータならば概ね閲覧・検索とも問題なく、従って個人の機材でも対応は可能である。しかし CD - ROM で供給される資料についてみると、ほぼ全てが Microsoft Windows 上で動作するものの、日本語版上では（仮に動作可能と謳っていても実際には）不具合を起こすものがまあり、また大部なものも多く、個人レベルでの対応は簡単ではない。そこで今回は CD - ROM 資料の利用に照準を

合わせ、コンピュータ 2 台に各々中文簡体版及び韓国語版の WindowsXP をインストールすることで、基礎となる環境を整えることとした。

現在 CD - ROM で供給されている資料は古典文献や新聞ばかりでなく、法律、経済、考古学にかかるものなど多岐にわたっており、例えば中国関係だけでも、新聞では『人民日報五十年図文数拠系列光盤』、法律では『中国法律法規大典』及びその更新版、経済では『中華人民共和国工業経済地図集』、また考古学に関する代表的雑誌の電子版として『考古雑誌・全文版』など多数が存在する。今回は予算の制約もあり、古典文献から中国語資料は『四部叢刊電子版』を、韓国語資料は朝鮮史を研究する上で基礎的な史料となる『三国史記』等を収録した『韓国歴史五千年』を、既蔵の資料との連携も考えて導入した。

電子資料は有用なものではあるが、しかし特有の難点も持つものであり、利用には注意が必要である。導入の初めにあって、ここでは『四部叢刊電子版』を例に取り上げつつ、その実際に少し触れておきたい。

『四部叢刊』とは、1919年（民国 8 年）、当時上海にあった商務印書館によって刊行が始められた叢書である。重要な文献が質の良い版本で揃えられているというその特長から、中国の古典を研究するにあたって基本となる叢書として利用されており、中央図書館にも以前から備えられている。電子版はこの『四部叢刊』をテキストデータ化し、逐字検索ができるようにしたものである（なお底本には北京大学図書館所蔵のものが用いられ、初編の部分は1919年刊行の初次本が使われている）。検索の仕方など具体的な利用方法についてはコンピュータの設置場所に手引を常置しているのでそちらをご覧ください。

この電子資料の最大の利点は、何よりも古典研究の基礎となる叢書から、わずかの間に総当たり

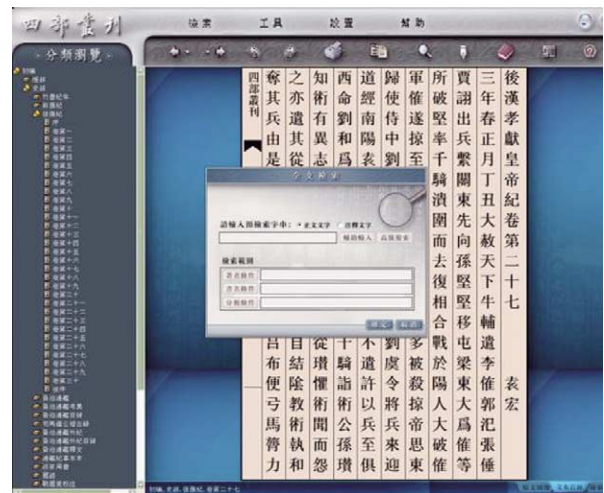


導入したコンピュータと電子資料

で用例を集められるという点にある。文献を講読する際には、その中で使われている語彙がその時代どのように用いられていたのかといった、辞書からだけでは充分に得ることができない情報を必要とすることがある。電子資料を用いればある語彙について時代を限定して用例を集めることも、あるいは通時的に集めることも自在であり、さらにはその語彙と密接に関わって語られる事柄が何であるのか情報を集めることもできる。従来こういった作業が長い時間を費やして行われてきたことを考えれば、これが文献を読む上で極めて有用なツールであることは言を俟たないであろう。

しかし、自在といい有用といったが、それはもちろん使い手の知識や技術、意識に依存する。コンピュータの操作方法は言うまでもないとしても、検索の対象とする文献や版本それ自体の知識が備わっていなければ、電子資料を使いこなすことはできない。簡単な例を挙げよう。中国によくある姓の一つである「袁」は、しばしば「表」と書かれることがある。実は上に挙げた図版の1行目末尾でもこの書物の著者名「袁宏」の「袁」がそうになっているのだが、しかしこれらはデータ上は別字扱いであり、実は「袁宏」と入力してもこの用例にたどり着くことはできない。同様の現象は「説」とその異体字「説」などでも起こるのだが、特に『四部叢刊』に採用されている版本で特殊な字体を用いているような場合には、字体のデータ上の扱いに注意を払わないと思わぬ落とし穴にはまることになる。

しかしこういった事態は、電子資料の仕様についての知識とあわせて、この場合であれば本来の、すなわち紙媒体として編纂された『四部叢刊』について基本的な知識を持ち、実際にそれに触れ、使われている字体や書式などに馴染んでおれば、比較的容易に避けられるものであろう。電子資料の登場は情報の蓄積に対するアクセス窓口が一つ増えたということであって、電子資料が情報の全てになったということではない。文献に馴染むことで得た知識を土台に電子資料を利用し、電子資料から得られた知識を使ってさらに文献に馴染んでいく、というふうに、情報の蓄積を使いこなす



『四部叢刊電子版』画面

ためのツールと捉えるのが現時点で最も有益な利用法と考えられよう。

今回コンピュータを地階書庫に設置したのもこういった電子資料の利用法を考慮してのことであり、『四部叢刊』のみならず書庫に収蔵されている多くの関連文献をも実見しながら電子資料を利用することができれば、その特長を最大限活かすことができ、教育・研究に裨益するところが多いのではないかと考えている。今回導入した機材と電子資料の活用はまだ緒についたばかりであるが、まずは電子資料を有用なインデックスとして駆使することによって、図書館に既蔵の資料もまたより活用されるようになることを願っている。

今回導入した電子資料は予算の都合もあり古典文献に偏ってしまったが、先述したように他にも新聞や雑誌、法律、経済、考古学など様々な分野のものが陸續と発行されており、上述したような電子資料の利点から考えれば、むしろその有効性は古典文献以上にこれらの分野で発揮されるのではないかとも思われる。昨今の状況をみれば、今後どの分野でも一層の電子資料の導入・活用を迫られるであろうが、今回導入した機材がその基礎として充分に利用されることを望みたい。

(あべ そういちろう 金沢大学文学部)

平成16年度附属図書館・資料館特別展

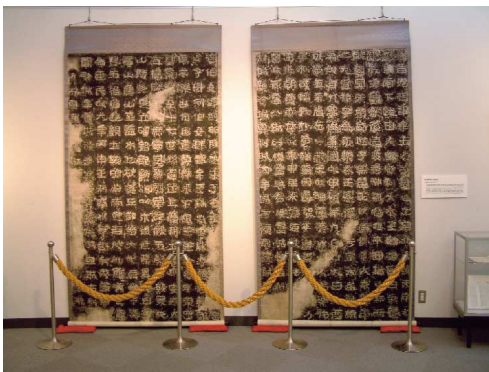
「文字・人・こころ - 金沢大学ゆかりの墨蹟・拓本・手跡」

金沢大学ゆかりの墨蹟・拓本・手跡を、その歴史的背景を考察しながら紹介しようと10月25日から11月7日まで特別展示を行いました。より多くの方にご覧いただきたいと金大祭にあわせた土日も開館し、その結果257名の来館者(学生114名,教職員50名,一般市民93名)がありました。

当初は学内にありながらもなかなか人の目に触れる機会のない墨蹟の展示を予定していましたが、準備をすすめていく中で、よりテーマに深みを持たせるために金沢市立玉川図書館近世史料館、第四高等学校同窓会、前田土佐守家資料館からも関連の資料を借用し、全部で50点の資料を9つのテーマにわけ展示しました。以下テーマごとに主な展示物を紹介します。

1. 高句麗広開土王碑拓本

大正5年に第四高等学校へ寄贈され、金沢大学へ受け継がれたもの。初公開。



2. 「明倫堂」加賀藩校の扁額

扁額の題字を書いた新井白蛾や加賀藩校の成立に関わる資料。

3. 「経武館」加賀藩武学校の扁額

扁額の題字を書いた前田直方の肖像画をはじめとした資料。

4. 蘭医学の導入

加賀藩の蘭方藩医、黒川良安の書状。

5. 金沢藩お雇外国人教師スロイス

明治4年から3年間金沢藩医学館において医学生徒の教育と病院内外の患者の治療に従事したスロイスの功績や講義録、使用した機器、教科書など。



6. 「金沢病院」蘭医学からドイツ医学へ

明治12年に落成した金沢病院の扁額(三条実美書)と当時の細見図。

7. 第四高等中学校校舎の設計図・棟札

明治22年着工、26年に落成した第四高等中学校校舎の講堂や教場の設計図。

8. 第四高等学校をめぐる人々

第四高等学校に飾られた扁額や講義録など。扁額「至誠無息」(岡上梁書)と四高教授市村塘の東京帝国大学講義録は初公開。

9. 石川の知識人

図書館、資料館が所蔵する石川県の知識人の書、著作など。

この地ではぐくまれ、金沢大学へとつながる教育の歴史やこれに携わった先人のこころを展示資料から窺い知ることができたのではないのでしょうか。実施したアンケートにも好意的な感想が多く寄せられました。

詳細な解題がついた図録は、図書館中央館書庫(請求記号 069 9:K16)に配架されていますのでご覧ください。

(押見智美 参考調査係)

図書館のトピックス



「成瀬正居日記」を翻刻・電子化

元金沢大学附属図書館職員の梶井重明さんが「成瀬正居日記」の翻刻・電子化をスタートさせました。これは梶井さんがボランティアで行なっているもので、下記のサイトからご覧いただけます。現在、第1冊と第2冊の翻刻文を読むことができます。虫食いが多くて判読に困難が予想されますが、図書館や図書館資料をこよなく愛した梶井さんの挑戦を心より応援します。 <http://narusenikki.web.infoseek.co.jp/>



マイクロ資料室を館内移転しました

このたび、空調設備のある部屋（同じ三階）へ移転しました。利用時間は、これまでの平日16時30分を17時30分（休業期間は17時）までに延長し、利用環境の整備を図りました。地元紙の北国新聞、北陸中日新聞等のマイクロ資料も配置してありますので、セルフサービスでご利用できます。資料の貸出は行なっていません。利用の申し込みはカウンター又は電話予約（内線2215）をお願いします。



自然科学系図書館 - もうすぐ完成



建設中の外観



自動化書庫

現在、角間キャンパス南地区に自然科学系図書館を建設中です（3月竣工、4月暫定オープン、10月全面オープンの予定）。この図書館では、自然科学系の専門図書・雑誌を中心に学内外の利用者に対してサービスを行います。この図書館の最大の特徴は自動化書庫が導入される点です。OPACで取り出したい資料を指定すると資料の入ったコンテナが図書館のカウンターまでは運ばれて来るシステムになっています。12月末に建設中の建物を見学した際の写真を紹介します

ありがとうございました 本学教員著作等寄贈図書リスト

2004 / 7 ~ 2004 / 12

岩喬（名誉教授）著
続 独りよがりの記
近代文芸社，2003．10
（医図書 WZ100：H675）

恵土孝吉（教育学部教授）分担執筆
教育剣道の科学
大修館，2004．9
（図開架375 49：K99）

新しい剣道の授業づくり
大修館，2004．11
（図開架375 49：S158）

小西健二（名誉教授）分担執筆
日本のサンゴ礁
環境省，2004．3
（図書庫455 9：N719）

Coral Reefs of Japan
Ministry of the Environment，2004．3
（図書庫455 9：C787）

藤曲哲郎（自然科学研究科教授）監訳
確率論入門
日本評論社，2004．8
（図開架417.1：G864）

山口成良（名誉教授）著
視床と精神医学
医学書院，2004．8
（医図書 WM100：S558）
（図開架493.7：Y19）

大久保英哲（教育学部教授）編
Local identity and sport
Academia Verlag, 2004
（図書庫780.2：L811）

奥田晴樹（教育学部教授）著
日本近世土地制度解体過程の研究
弘文堂，2004．9
（図書庫611.2：O41）

永坂鉄夫（名誉教授）著
ドンキホーテの誤解：随想
前田書店，2004．9
（図開架904：N147）

小村照寿（自然科学研究科教授）著
フレンドリー無機化学
三共出版，2004．10
（図開架435：K81）
（工図435：K81）

海野八尋（経済学部教授）分担執筆
岐路に立つ日本
吉川弘文館，2004．9
（図開架210.1：N719：28）

中垣良一（自然科学研究科教授）分担執筆
磁気科学
アイピーシー，2002．11
（薬図書427.8：O99）
Dynamic spin chemistry
Kodansha, c1998
（薬図書431.3：D997）

小山善子（医学部教授）共訳
記憶：専門家への手引き書：医療・心理・福祉
・法律
新樹会創造出版，2004．9
（医保図書141.34：P247）

竹田亮祐（名誉教授）著
笠舞詩草
前田書店，2004．11
（医図書919.6：T126）
（図開架919.6：T126）



としょかん日誌（2004年7月～12月）

7月1日 第51回国立大学図書館協会総会（大阪大学）橋本哲哉（理事），由良信道（情報部長），牧村正史（図書館サービス課長）出席
7月5日 平成16年度大学図書館職員長期研修（東京都）押見智美（参考調査係）参加
8月4日 平成16年度東日本図書館等職員著作権実務～6日 講習会（東京大学）内藤裕美子（図書情報

係）参加
10月20日 平成16年度石川県図書館大会（松任市立図書館）巖本康治（参考調査係長）参加
11月9日 平成16年度大学図書館職員研修会～12日（京都大学）佐藤幸代（自然系情報サービス係）参加



金沢大学附属図書館報「こだま」第155号

発行：金沢大学附属図書館 編集：広報委員会
〒920-1192 金沢市角間町 電話 076-264-5200
ホームページURL <http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/>
電子メールアドレス etsuran@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

2005年1月20日発行
印刷：株式会社 橋本確文堂

読者の皆様からのおたよりをお待ちしております。

表題地模様©Toku Yusui(加賀友禅染絵『さやぐ、おどる』。由水十久(初代。1913-1988)は金沢出身の加賀友禅作家です。)